

# 天守物語

泉鏡花

青空文庫



時 不詳。ただし封建時代——晩秋。日没前より深更にいたる。

所 播州姫路。白鷺城の天守、第五重。

登場人物

天守夫人、富姫。（打見は二十七八）岩代国猪苗代、

亀の城、亀姫。（二十ばかり）姫川図書之助。（わか

き鷹匠）小田原修理。山隅九平。（ともに姫路城主武

田播磨守家臣）十文字ヶ原、朱の盤坊。茅野ヶ原の舌

長姥。（ともに亀姫の眷属）近江之丞桃六。（工人）

桔梗。萩。葛。女郎花。撫子。（いずれも富姫の侍女）

薄。（おなじく奥女中）女の童、禿、五人。武士、討

手、  
大勢。

舞台。天守の五重。左右に柱、向つて三方を廻廊まわりろうか下のごとく余して、一面に高く高麗こうらいべりの畳を敷く。紅くれないの鼓の緒、  
 処々に蝶結びして一ひとすじ条、これを欄干のごとく取りまわして  
 柱に渡す。おなじ鼓の緒のひかえづなにて、向つて右、廻廊  
 の奥に階子はしごを設く。階子は天井に高く通ず。左の方廻廊かたの奥  
 に、また階子の上下の口あり。奥の正面、及び右なる廻廊の  
 半ばより厚き壁にて、広き矢狭間やざま、狭間はざまを設く。外面は山岳  
 の遠見とおみ、秋の雲。壁に出入りの扉あり。鼓の緒の欄干外そと、左  
 の一方、棟むな、葺が、並びに樹立こたちの梢こずえを見す。正面おなじく森しん  
 々たる樹木の梢。

めのわらわ  
女童三人——合唱——

ここはどここの細道じや、細道じや、

天神様の細道じや、細道じや。

——うたいつつ幕開あく——

侍女五人。桔梗ききよう、女郎花おみなえし、萩はぎ、葛くず、撫子なでしこ。各名おのおのにそぐ

える姿、鼓の緒の欄干に、あるいは立ち、あるいは坐いて、手に五色ごしきの絹糸を巻きたる糸杵きねに、金きん色しよく銀色の細き棹さおを通し、糸を松杉の高き梢くぐを潜くぐらして、釣つりの姿すがたす。

女童三人は、緋ひのきつけ、唄うたいつづく。——冴さえて且かつつ寂さびしき声こゑ。

少し通して下さんせ、下さんせ。

ごようのないもな通しません、通しません。

天神様へ願掛けに、願掛けに。

通らんせ、通らんせ。

唄いつつその遊戯をす。

すすき

薄、天守の壁の裡うちより出づ。壁の一劃かくはあたかも扉のごとく、

自由に開く、この婦おんなやや年かさ。鼈べっこう甲の突通し、御殿奥女

中のこしらえ。

ほおずき

薄 鬼灯さん、蜻蛉とんぼさん。

女童一 ああい。

しずか

薄 静しずかになさいよ、お掃除が済んだばかりだから。

女童二 あの、釣を見ましようね。

女童三　そうですね。

いたいけにうなず頷きあいつつ、侍女等の中に、はらはらと袖を交まじう。

薄　あたりみまわ(四辺をす)　これは、まあ、まことに、いい見晴しでござ

いますね。

葛　あの、猪苗代いなわしろのお姫様がお遊びにおいででございますから。

桔梗　お鬱陶うつとしかろうと思ひまして。それには、申分のございま

せんお日和でございますし、遠山はもう、もみじいたしましたから。

女郎花　矢狭間も、物見も、お目触りな、泥や、鉄の、重くるし

い、そとがこい外こい圀は、ちよつと取払っておきました。



薄 成程、成程、よくおなまけ遊ばす方たちにしては、感心にお  
 気のつきましたことでございます。

桔梗 あれ、人ぎきの悪いことを。——いつ私たちがなまけまし  
 たえ。

薄 まあ、そうお言いの口の下で、何をしておいでだろう。二階  
 から目薬とやらではあるまいし、お天守の五重から釣をするも  
 のがありますかえ。天の川は芝を流れはいたしません。富姫様  
 が、よそへお出掛け遊ばして、いくら間ひまがあると申したつて、  
 串じょうだん 戯ごではありません。

撫子 いえ、魚を釣るのではありません。

桔梗 旦那様の御前おまえに、ちようと活いけるのがございませんから、

みんな  
皆で取つて差上げようと存じまして、花を……あの、秋草を釣  
りますのでございますよ。

薄 花を、秋草をえ。はて、これは珍しいことを承ります。そし

て何かい、釣れますかえ。

めのわらわ  
女童の一人の肩に、袖でつかまつてさしのぞ差覗く。

桔梗 ええ、釣れますとも、もつとも、新発明でございます。

薄 高慢なことをお言いでない。——が、つきましては、念のた  
めに伺いますが、お用いになります。……えさ餌の儀でござんすが  
ね。

撫子 はい、それは白露でございますわ。

葛 千草八千草秋草が、それはそれは、今頃は、露をたんと沢山欲しが

るのでございますよ。刻限も七つ時、まだ夕露も夜露もないのでございますもの。(隣を視る<sup>み</sup>) 御覧なさいまし、女郎花さんは、もう、あんなにお釣りなさいました。

薄 ああ、ほんにねえ。まったく草花が釣れるとなれば、さて、これは静<sup>しずか</sup>にして拝見をいたしましょう。釣をするのに饒舌<sup>しゃべ</sup>つては悪いと云うから。……一番<sup>いちばん</sup>だまつておとなしい女郎花さんがよく釣った、争われないものじゃないかね。

女郎花 いいえ、お魚とは違えますから、声を出しても、唄いまして構いません。——ただ、風が騒ぐと下<sup>い</sup>可<sup>け</sup>ませんわ。……餌の露が、ぱらぱらこぼれてしまいますから。ああ、釣れませんでした。

薄 お見事。

と云う時、女郎花、棹さおながらくるくると棹を巻戻す、糸につれて秋草、欄干に上り来るきた。さきかたに傍わらに置きたる花とともに、女童の手に渡す。

桔梗 釣れました。(おなじく糸を巻戻す。)

菘 あれ、私も……

花につれて、黄と、白、紫の胡蝶こちようの群むれ、ひらひらと舞上る。

葛 それぞれ私も——まあ、しおらしい。

薄 桔梗さん、棹をお貸しな、私も釣ろう、まことに感心、おつだことねえ。

女郎花 お待ち遊ばせ、大層風が出て参りました、餌が糸にとま

りますまい。

薄 意地の悪い、急に激しい風になったよ。

萩 ああ、内うちぐるわ廓の秋草が、美しい波を打ちます。

桔梗 そう云ううちに、色もかくれて、薄すすきばかりが真白まっしろに、水

のように流れて来ました。

葛 空は黒くろくも雲が走りますよ。

薄 先刻さつきから、野も山も、不思議に暗いと思っていた、これは酷ひど

い降りになりますね。

舞台暗くなる、電光閃ひらめく。

撫子 夫おくさま人は、どこへおいで遊ばしたのでございますえ。早く

お帰り遊ばせば可ようございますね。

薄 平時いづものように、どこへとも何ともおつしやらないで、ふいと

お出ましになつたもの。

萩 お迎いにも参られませんかねえ。

薄 お客様、亀姫様のおいでの時刻を、それでも御含みでいらつ

しやるから、ほどなくお帰りでござんしよう。——皆さんが、

御心入れの御馳走ごちそう、何、秋草を、早くお供えなさるが可よいね。

女郎花 それこそ露の散らぬ間に。——

正面奥の中央、丸柱かたわらの傍よろいびつに鎧櫃よろいびつを据えて、上に、金色こんじきの

眼まなこ、白銀しろがねの牙きば、色は藍あいのごとき獅子頭ししがしら、萌黄錦もえぎにしきの母衣ほろ、

朱の渦まきたる尾を装いたるまま、莊重にこれを据えたり。

——侍女等、女童とともにその前に行き、跪ひざまずきて、手に手に

秋草を花籠に挿す。色のその美しき蝶の群、ひとし齊く飛連れてあ  
 たりらに舞う。雷らいやや聞ゆ。雨き来る。

薄（薄暗き中に）御覽、両眼赫かく耀と、牙も動くように見える  
 こと。

桔梗 花も胡蝶ちようもお氣に入つて、お嬉しいんでございましょう。

時に閃電せんす。光の裡うちを、衝つと流れて、胡蝶ちようの彼かし処こに流る  
 る処、ほとんど天井を貫きたる高き天守の棟に通はずる階し子。

——侍女等、飛ぶ蝶の行方につれて、ともに其方そなたに目を注ぐ。

女郎花 あれ、夫人おくさまがお歸りでございますよ。

はらはらとその壇もとの許もとに、振袖、詰袖、揃つて手をつく。階  
 子の上より、まず水色の衣きぬの褌つま、裳もすそを引く。すぐに蓑みのを被かつぎ

たる姿見ゆ。長たけなす黒髪、片手に竹笠、半おもてば面おほを蔽おほいたる、  
美しく氣高きしよき貴女、天守夫人、富姫。

夫人（その姿に舞すがい縋すがる蝶々の三つ二つを、蓑を開いて片袖に  
受く）出迎えかい、御苦勞だね。（蝶に云う。）

——お帰り遊ばせ、——お帰り遊ばせ——侍女等、口々に言  
迎う。——

夫人 時々、ふいと氣まかせに、野分のわきのような出歩であ行きを、……  
ハタと竹笠を落す。女郎花、これを受け取る。貴女おもての面すが、凄  
きばかり白く朧ろうた長けたり。

露も散らさぬお前たち、花の姿に氣の毒だね。（下りかかりて  
壇に弱腰、廊下もすそに裳もすそ。）



薄 もつたい 勿体ないことを御意遊ばす。——まあ、お前様、あんなものを召しまして。

夫人 似合つたかい。

薄 なおその上に、御前様ごぜんさま、お痩せ遊ばしておがまれます。柳よりもお優しい、すらすらと雨の刈萱かるかやを、お被け遊ばしたよかうにござります。

夫人 嘘ばつかり。小山田の、案山子かかしに借りて来たのだものを。

薄 いいえ、それでも貴女あなたがめしますと、玉、白銀しろがね、揺ゆるぎの糸の、鎧よろいのようにもおがまれます。

夫人 賞ほめられてちつと重くなつた。(蓑蓑を脱ぐ) 取つておくれ。

撫子、立ち、うけて欄干にひらりと掛く。

蝶の数、その蓑に翼を憩う。……夫人、獅子頭に会釈しつつ、  
座に、褥しとねに着く。脇きょうそく息。

侍女たちかしづく。

少し草臥くたびれましたよ。……お亀様はまだお見えではなかつたら  
うね。

薄 はい、お姫様ひいさまは、やがてお入りいでござりましょう。それに  
つけましても、お前様おかえりを、お待ち申上げました。――  
そしてまあ、いずれへお越し遊ばしました。

夫人 夜叉やしやケ池いけまで参つたよ。

薄 おお、越前国大野郡おおのごおり、人跡絶えました山奥の。

萩 あの、夜叉ケ池まで。

桔梗 お遊びに。

夫人 まあ、遊びと言えは遊びだけでも、大池のぬしのお雪様に、ちつと……頼みたい事があつて。

薄 わたくし私はじめ、ここに居ります、誰ぞお使いをいたしますもの、御自分おいで遊ばして、何と、雨にお逢いなさいましてさ。

夫人 その雨を頼みに行きまして。——今日はね、この姫路の城……ここから視れば長屋だが、……長屋の主人、それ、播磨守が、秋の野山へ鷹狩に、大勢で出掛けました。皆知つて

おいでだろう。空は高し、渡鳥、色鳥の鳴く音は嬉しいが、田畑と言わず駆廻つて、きやつきやつと飛騒ぐ、知行とりども人間の大声は騒がしい。まだ、それも鷹ばかりなら我慢もする。

近頃は不作法な、弓矢、鉄砲で荒立つから、うるささもうるさしき。何よりお前、私のお客、この大空の霧を渡つて輿かこでのお亀様にも、途中失礼だと思つたから、雨風と、はたした神で、鷹狩の行列を追崩す。——あの、それを、夜叉ヶ池のお雪様にお頼み申しに参つたのだよ。

薄 道理こそ時ならぬ、急な雨と存じました。

夫人 この辺あたりは雨だけかい。それは、ほんの吹降りの余波なごりである。鷹狩が遠出をした、姫路野の一里塚のあたりをお見な。暗や夜のようみよな黒い雲、眩まぼゆいばかりの電いなびかり光、可おそろし恐ひようい雹も降りました。鷹狩の連中は、曠野あらのの、塚の印しるしの松の根に、濡みに寄つた鮎ふなのように、うようよ集たかつて、あぶあぶして、あやい笠が泳

ぐやら、陣羽織が流れるやら。大小をさしたものが、ちつとは雨にも濡れたが可い。慌てる紋は泡沫あぶくのよう。野袴のばかまの裾すそを端は折しよつて、灸きゆうのあとを出すのがある。おお、おかしい。(微笑ほほえむ)粟粒あわつぶを一つ二つと算かぞえて拾かぞう雀かぞでも、俄にわか雨あめには容よう子すが可い。五百石、三百石、千石一人で食はむものが、その笑止はさと言いつてはない。おかしいやら、気の毒はやら、ねえ、お前。

薄　はい。

夫人　私はね、群鷺むらさぎヶ峰みねの山はの端はに、掛かけ稻いねを楯たてにして、戻もどり道みちで、そつと立たつて視ながめていた。そこには昼ひるの月つきがあつて、雁かりがね金かねのように(その水色みづいろの袖そでを圧おさう)その袖そでに影かげが映うつつた。

影かげが、結むすんだ玉たまずさずさのようにも見みえた。——夜叉やしゃヶ池いけのお雪ゆき様さま

は、はげし激いなかにお床ゆかしい、野はその黒雲くろくも、尾上おのえは瑠璃るり、皆、  
 あの方のお計らい。それでも鷹狩の足も腰も留めさせずに、大  
 風と大雨で、城まで追返しておくれの約束。鷹狩たちが遠くか  
 ら、松を離れて、その曠野を、黒雲の走る下に、泥川のように  
 流れてくるに従つて、追手おいての風の横よこし吹ぶき。私が見ていたあた  
 りへも、一村むら雨颯さめとかかつたから、歌も読まずに蓑をかりて、  
 案山子こどもの笠をさして来ました。ああ、その蜻蛉とんぼと鬼灯ほおずきたち、  
 小児こどもに持たして後ほどに返しましょう。

薄 何の、それには及びますまいと存じます。

夫人 いえいえ、農家のものは大切だから、等閑なおよざりにはなりません。

薄　その儀は畏かしこまりました。お前様、まあ、それよりも、おめしかえを遊ばし、おめしものが濡れまして、お気味が悪うござりましょう。

夫人　おかげで濡れはしなかった。気味の悪い事もないけれど、隔てぬ中の女同士も、お亀様に、このままでは失礼だろう。

(立つ) 着換えましょうか。

女郎花　ついでに、お髪ぐしも、夫人だんなさま様

夫人　ああ、あげてもらおうよ。

夫人に続いて、一同、壁の扉に隠る。  
女めの童わらわのこりて、合

唱す――

ここはどここの細道じゃ、細道じゃ。

天神様の細道じゃ、細道じゃ。

時に棟に通ずる件の階子を棟よりして入来る、岩代国  
 麻耶郡猪苗代の城、千畳敷の主、亀姫の供頭、朱の盤  
 坊、大山伏の扮装、頭に犀のごとき角一つあり、眼円かに  
 面の色朱よりも赤く、手と脚、瓜に似て青し。白布にて蔽  
 うたる一個の小桶を小脇に、柱をめぐりて、内を覗き、女童  
 の戯るるを視つつ破顔して笑う

朱の盤 かちかちかちかち。

齒を噛鳴らす音をさす。女童等、走り近く時、面を差寄せ、

大口開く。

もおう！（獣の吠ゆる真似して威す。）



女童一 可厭いやな、小父おじさん。

女童二 可恐こわくはありませんよ。

朱の盤 だだだだだ。(濁れる笑わらい) いや、さすがは姫路お天守の、

富姫御前の禿かむろたち、変化心へんげごころ備わつて、奥州第一の赭あかつら面に、

びくともせぬは我折がおれ申す。——さて、更あらためて内方うちかたへ、もの

も、案内を頼みましょう。

女童三 屋根から入った小父さんはえ？

朱の盤 これはまた御挨拶ごあいさつだ。ただ、猪苗代から参つたと、さ

さ、取次、取次。

女童一 知らん。

女童三 べいい。(赤べろする。)

朱の盤 これは、いかな事——（立直る。大音に）ものも案内。

薄 どうれ。（壁より出迎う）いずれから。

朱の盤 これは岩代国会津郡十文字ヶ原青五輪のあたりに罷まかり

在ある、奥州変化の先達せんだつ、允殿館いんでんかんのあるじ朱の盤坊でござい

る。すなわち猪苗代の城、亀姫君の御供をいたし罷まかり出ました。

当お天守富姫様へ御取次を願いたい。

薄 お供御苦勞に存じ上げます。あなた、お姫様ひいさまは。

朱の盤 （真仰あおむ向けに承てんじよう塵ちりを仰ぐ）屋の棟かぞに、すでに輿かこをば

お控おさえなさるる。

薄 うちかた夫人も、お待兼ねでございます。

手を敲たたく。音につれて、侍女三人出づ。齊ひとしく手をつく。

早や、御入おんいらせ下さりませ。

朱の盤（空へ云う）輿かこ傍へ申す。此方こなたにもお待まちうけじや。――

――姫君、これへお入いりのよう、舌長姥したながうば、取次とりつぎがつせえ。

階子はしごの上より、真先まつさきに、切きり禿かむろの女童、うつくしき手鞠てまり

を両袖に捧げて出づ。

亀姫、振袖、裯うちがけ襠たかまげ、文金の高髻たかまげ、扇子を手にす。また女

童、うしろに守まもり刀がたなを捧ぐ。あとおさ圧おさえに舌長姥、古びて黄

ばめる練衣ねりぎぬ、褌あせたる紅あかはかまの袴かまにて従きたい来る。

天守夫人、侍女を従え出で、設けの座に着く。

薄（そと亀姫を仰ぐ）お姫ひいさま様。

出むかえたる侍女等、皆ひれ伏す。

亀姫 お許し。

しとやかに通り座につく。と、夫人と面を合すとともに、双方よりひたと褥しとねの膝を寄す。

夫人 (親しげに微笑ほほえむ) お亀様。

亀姫 お姉様あねえさま、おなつかしい。

夫人 私もお可懐なつかしい。――

――(間。)

女郎花 夫人おくさま。(と長煙管ながぎせるにて煙草たばこを捧ぐ。)

夫人 (取つて吸う。そのまま吸口を姫に渡す) この頃は、めしあがるそうだね。

亀姫 ええ、どちらも。(うけて、その煙草を吸いつつ、左の手

にて杯の真似をす。）

夫人 困りましたねえ。（また打笑む。うちえ）

亀姫 ほほほ、貴女をあなた旦那樣にはいたすまいし。

夫人 憎らしい口だ。よく、それで、猪苗代から、この姫路まで  
——道中五百里はあろうねえ、……お年寄。

舌長姥 御意にござります。……海も山もさしわたしに、風でお  
運び遊ばすゆえに、半日路じには足りませぬが、宿しゆくじゆく々ひろを歩い  
ましたら、五百里……されば五百三十里、もそつともござりま  
しょうぞ。

夫人 ああね。（亀姫に）よく、それで、手鞆をつきに、わざわ  
ざごこまでおいでだね。

亀姫 でございますから、お姉様あねえさまは、私がお可愛うかわゆござい  
 しょう。

夫人 いいえ、お憎らしい。

亀姫 御勝手。(扇子を落す。)

夫人 やつぱりお可愛い。(その背を抱きいだ、見返して、姫に附添  
 える女童に) どれ、お見せ。(手鞆を取る) まあ、綺麗な、私  
 にも持つて来て下されば可よいものを。

朱の盤 ははッ。(その白布の包を出しいだ) 姫君より、貴女様へ、  
 お心入れの土産がこれに。申すは、差出がましゆうござるなれ  
 ど、これは格別、奥方様の思召おぼしめしにかないましよう。：何と、  
 姫君。(色を伺う。)

亀姫 ああ、お開き。お姉様の許とこだから、遠慮はない。

夫人 それはそれは、お嬉しい。が、お亀様は人が悪い、中は磐ば

んだいさん

梯山の峰の煙か、虚空蔵こくうぞうの人魂ひとたまではないかい。

亀姫 似たもの。ほほほほほ。

夫人 要りません、そんなもの。

亀姫 上げません。

朱の盤 いやまず、（手を挙げて制す）おなかがよくてお争い、

お言葉の花が蝶のように飛びまして、お美しい事でござる。：

：さて、此方こなたより申す儀ではなけれども、奥方様、この品ばかりは

はお可い厭やではござるまい。

包を開く、首くび桶おけ。中より、色白き男の生首を出し、もとど

りを掴つかんで、ずうんと据よう。

や、不重宝ぶちようほう、途中揺ゆり溢こぼいて、これは汗あせが出でました。（その

首、血だらけ）これ、姥殿うば、姥殿。

舌長姥 あいあい、あいあい。

朱の盤 御進物が汚れたわ。鱗うろこの落ちた鱸すずきの鰭ひれを真水で洗すすう、手

の悪い魚売人には似たれども、その儀では決してない。姥殿、

此方こなた、一拭ひとぬぐい、清めた上で進すすまいかの。

夫人 （煙管を手に支つき、面正おもてしく屹きつと視みて）氣遣いには及びま

せん、血だらけなは、なおおいしかろう。

舌長姥 こぼれた糞あつものは、埃溜はきだめの汁でござるわの、お塩梅あんばいには

寄りませぬ。汚穢むさや、見た目に、汚穢むさや。どれどれ掃除して参



らしようぞ。(紅の袴にて膝行り出で、桶を皺手にひしと圧え、

白髪を、ざつと捌き、染めたる齒を角に開け、三尺ばかりの長

き舌にて生首の顔の血をなめる) 汚穢や、(ぺろぺろ) 汚穢や  
の。(ぺろぺろ) 汚穢やの、汚穢やの、ああ、甘味やの、汚穢

やの、ああ、汚穢いぞの、やれ、甘味いぞのう。

朱の盤(慌しく遮る) やあ、姥さん、齒を当てまい、御馳走が

減りはせぬか。

舌長姥 何のいの。(ぐったりと衣紋を抜く) 取る年の可恐しさ、

近頃は齒が悪うて、人間の首や、沢庵の尻尾はの、かくやに

せねば咽喉へは通らぬ。そのままの形では、金花糖の鯛でさえ、

横嚙りにはならぬ事よ。

朱の盤 後生らしい事を言うまい、彼岸は過ぎたぞ。——いや、  
 奥方様、この姥が件くだんの舌にて舐なめますると、鳥とりけもの 獣も人間も、  
 とろとろと消えて骨ばかりになりますわ。……そりやこそ、申  
 さぬことではなかつた。お土産の顔つきが、時の間まに、細長う  
 なりました。なれども、過あやまち失の功名、死んで変りました人相  
 が、かえつて、もとの面めん体ていに戻りました。……姫君も御覽ごらんぜ  
 い。

亀姫 (扇子を顔に、透かし見る) ああ、ほんになあ。

侍女等一同、瞬じつきもせず熟じつと視みる。誰も一口食べたそう。

薄 お前様——あの、皆さんも御覽なさいまし、亀姫様お持たせ  
 のこの首は、もし、この姫路の城の殿様の顔に、よく似ている

ではござんせぬか。

桔梗 真ほんに、瓜二つでございますねえ。

夫人 (打うちうなず 頷うなずく) お亀様、このお土産は、これは、たしか：

：

亀姫 はい、私が廂ひさしを貸す、猪苗代亀ヶ城しろの主、武田衛門之介えもんの

首でございますよ。

夫人 まあ、貴女あなた。(間) 私のために、そんな事を。

亀姫 構かまいません、それに、私がいたしたとは、誰も知りはしませんもの。私が城を出ます時はね、まだこの衛門之介めかけはお妾めかけの膝ひざに凭より掛かつて、酒を飲んでおりました。お大名の癖くせに意地いぢが汚よごくつてね、鯉こい汁じゆを一口に食べますとね、魚はらわたの腸はらわたに針はりがあつ

て、それが、咽喉のどへさきさつて、それで亡くなるのでございますから、今頃ちようどそのお膳が出たぐらいでございますよ。

(ふと驚く。扇子を落す) まあ、うっかりして、この咽喉に針がある。(もとどりを取つて上ぐ) 大変なことをした、お姉あねえ様に刺さつたらどうしよう。

夫人 しばらく！ 折角、あなたのお土産を、いま、それをお抜きだと、衛門之介も針が抜けて、蘇よみがえ返つてしまいました。

朱の盤 いかさまな。

夫人 私が気をつけます。可ようござんす。(扇子を添えて首を受取る) お前たち、瓜を二つは知れたこと、この人はね、この姫路の城の主、播磨守とは、血を分けた兄弟よ。

侍女等目と目を見合わす。

ちよつと、獅子にお供え申そう。

みずから、獅子頭の前に供う。獅子、その牙きばを開き、首を吞のむ。首、その口に隠る。

亀姫 (熟じつと視みる) お姉あねえさま様、お羨うらやましい。

夫人 え。

亀姫 旦那様が、おいで遊ばす。

間。——夫人、姫と顔を合す、互かんじに莞爾かんじとす。

夫人 嘘まことが真まことに。……お互まことに……

亀姫 何の不足はないけれど、

夫人 こんな男ほしが欲ほしいねえ。——ああ、男と云えば、お亀様、あ

なたに見せるものがある。——桔梗さん。

桔梗 はい。

夫人 あれを、ちよつと。

桔梗 かしこ 畏まりました。（立つ。）

朱の盤 （不意に）や、姥殿、獅子のお頭に見惚れまい。尾籠千

万。

舌長姥 （時に、うしろ向きに乗出して、獅子頭を視めつつあり）

としより 老 人 じゃ、当館やかた奥方様も御許され。見惚れるに無理はないわ

いの。

朱の盤 いやさ、見惚れるに仔細しさいはないが、姥殿、姥殿はそこに

居て舌が届く。（苦にがわらい笑す。）

舌長姥思わず正面にその口を蔽おほう。侍女等忍びやかに皆笑う。  
 桔梗、鍬形くわがた打つたる五枚鍬しころ、金の竜頭たつがしらの兜かぶとを捧げて出  
 づ。夫人と亀姫の前に置く。

夫人 貴女、この兜はね、この城の、播磨守が、先祖代々の家の  
 宝で、十七の奥蔵おくぐらに、五枚鍬しころに九ツの錠じょうを下して、大切に秘  
 蔵をしておりますのをね、今日お見えの嬉しさに、実は、貴女  
 に上げましようと思つて取出しておきました。けれども、御おここ  
 心入ろいりの貴女のお土産みやで、私のはお恥しくなりました。それだ  
 から、ただ思つただけの、申訳に、お目に掛けますばかり。

亀姫 いいえ、結構、まあ、お目覚しい。

夫人 差上げません。第一、あとで気がつきますとね、久しく蔵し

まいこ  
 込んであつて、かび臭い。蘭麝らんじゃの薫かおりも何にもしません。大阪  
 城の落ちた時の、木村長門守の思切つたようなのだと可いけれ  
 ど、……勝かち戦いくさのうしろの方で、矢玉の雨あまやどり宿どりをしていた、  
 ぬくいのらしい。御覧なさい。

亀姫（鉢はち金がねの輝く裏を返す）ほんに、討死をした兜ではあり  
 ませんね。

夫人 だから、およしなさいまし、葛や、しばらくそこへ。

指図のまま、葛、その兜を獅子頭の傍かたえに置く。

お帰りまでに、きつとお気に入るものを調べて上げますよ。

亀姫 それよりか、お姉あねえさま様、早く、あのお約束の手鞠てまりを突い  
 て遊びましょうよ。



夫人 ああ、遊びましょう。——あちらへ。——城の主人あるじの鷹狩

が、雨風に追われ追われて、もうやがて大手さきに帰る時分、

貴女は沢山たんとお声がいいから、この天守から美しい声が響くと、

また立騒いでお煩いうるさい。

亀姫のかしずきたち、皆立ちかかる。

いや、御先達、お山伏は、女たちとここで一いっ献こんお汲くみがよい

よ。

朱の盤 吉祥天女、御功德でござる。(肱ひじを張ひつて叩こう頭とうす。)

亀姫 ああ、姥、お前も大事な、ここに居てお相伴をしや。――

――お姉あねえさま様に、私から我わが儘ままをしますから。

夫人 もつともさ。

舌長姥 もし、通草あけび、山ぐみ、山葡萄、手造りの猿の酒、山蜂の

蜜、蟻の甘露、諸もろはく白もござります、が、お二人様のお手鞠は、

唄を聞きますばかりでも寿命の薬と承る。かように年を取りま

すと、慾よくも、得も、はは、覚えませぬ。ただもう、長生ながいきがし

とうござりましてのう。

朱の盤 や、姥殿、その上のまた慾があるかい。

舌長姥 憎まれ山伏、これ、帰り途みちに舐なめられさっしやるな。

(とペろりと舌。)

朱の盤 (頭を抱う) わあ、助けてくれ、角が縮まる。

侍女たち笑う。

舌長姥 さ、お供をいたしましょうの。

夫人を先に、亀姫、薄と女の童等、皆行く。五人の侍女と朱の盤あり。

桔梗 お先達、さあさあ、お寛くつろきなさいまし。

朱の盤 寛がいで何とする。やあ、えいとな。

菫 もし、面白いお話を聞かして下さいましな。

朱の盤 聞かさいで何とする。(扇しやくを笏しやくに) それ、山伏と言つぱ

山伏なり。兜巾とぎんと云つぱ兜巾なり。お腰元と言つぱ美人なり。

恋路と言つぱ闇夜やみよなり。野道山路やまみちいと厭いとなく、修行積それがしんだる某

が、このいら高の数珠じゆずに掛かけ、いで一祈り祈るならば、などか

利りげん験げんのなかるべき。橋の下の菖蒲しょうぶは、誰たれが植うえた菖蒲ぞ、ぼ

ろぼん、ぼろぼん、ぼろぼんのぼろぼん。

侍女等わざとはらはらと逃ぐ、朱の盤五人を追廻す。

ぼろぼんぼろぼん、ぼろぼんぼろぼん。（やがて侍女に突かれ  
てどうと倒る）などか利験のなかるべき。

葛 利験はござんしようけれどな、そんな話は面白うござんせぬ。  
朱の盤（首を振って）ぼろぼん、ぼろぼん。

鞠唄聞ゆ。

——私わしが姉あねさん三人ござる、一人姉さん鼓が上手。

一人姉さん太鼓が上手。

いっちよいのしたやが下谷だてにござる。

下谷一番達だてしやでござる。二両で帯買うて、

三両で括くけて、括くけめ括くけめに七ななふさ総ささげて、

折りめ折りめに、いろはと書いて。――

葛 さあ、お先達、よしの葉の、よい女郎衆ではござんせぬが、

参つてお酌。(扇を開く。)

朱の盤 ぼろぼんぼろぼん。(同じく扇子にうく)おとととと、

ちようどあるちようどある。いで、お肴さかなを所望しよう。……な

どか利験のなかるべき。

桔梗 その利験ならござんしよう。女郎花さん、撫子さん、ちよ

つと、お立ちなさいまし。

ふたり両女立つ。

ここをどこぞと、もし人問わば、ここは駿河するがの

府中の宿よ、人に情なさけを掛川の宿よ。雉子きじの雌めんどり鳥

ほろりと落いて、打ちきせて、しめて、しよのしよの  
いとしよの、そぞろいとしゆうて、やるせ遺瀬なや。

朱の盤 やんややんや。

女郎花 今度はお先達、さあ。

葛 あなた貴方がお立ちなさいまし。

朱の盤 ぼろぼん、ぼろぼん。此方衆思こなたおもいざしを受きようならば。

侍女五人扇子を開く、朱の盤杯を一順す。すなわち立つ。腰  
なる太刀をすらりと抜き、以前の兜を切きつさき先にかけて、衝と  
天井に翳かざし、高脛たかすねに拍子を踏んで——

戈鋌かせんけんげき劍戟を降らすこと電光の如くなり。

盤ばんじやくいわお石巖を飛ばすこと春の雨に相同じ。

然りしかとはいえども、天帝の身には近づかで、

修羅かれがために破らる。

——お立ち——、（陰より諸声もろごえ。）

手早く太刀を納め、兜をもとに直す、一同つい居る。

亀姫 お姉様あねえさま、今度は貴方が、私へ。

夫人 はい。

舌長姥 お早々と。

夫人（領うなずきつつ、連れて廻廊にかかる。目の下遥はるかに瞰下みおろす）あ

あ、鷹狩が帰つて来た。

亀姫（ともに、瞰下す）先刻さつき私が参る時は、蟻のような行列が、

その鉄砲で、松並木を走っていました。ああ、首に似た殿様が、

馬に乗つて反返そりかえつて、威張つて、本丸へ入つて来ますね。

夫人 播磨守さ。

亀姫 まあ、翼の、白い羽の雪のような、いい鷹を持っているよ。

夫人 おお。（軽く胸を打つ）貴女。（間）あの鷹を取つて上げ  
ましようね。

亀姫 まあ、どうしてあれを。

夫人 見ておいで、それは姫路の、富だもの。

みの 蓑を取つて肩に装う、美しき胡蝶こちようの群、ひとしく蓑に舞う。  
さつ 颯と翼を開く風情す。

それ、人間の目には、羽衣を被きた鶴に見える。

ひらりと落す特、一羽の白鷹さつ颯と飛んで天守に上るを、手に



捕う。

——わつと云う声、地より響く——

亀姫 お涼しい、おあねえさま姉様。

夫人 この鷹ならば、鞠を投げてもとりましたよう。——たんと沢山お遊  
びなさいまし。

亀姫 あい。(嬉しげに袖にいだ抱く。そのまま、まつさき真先にはしご階子を上  
る。二三段、と振返りて、衝つと鷹を雪の手に据うるや否や)虫  
が来た。

云うとともに、袖を払って一筋の征そや矢をカラリと落す。矢は  
鷹狩うちの中より射掛けたるなり。

夫人 (齊ひとしくともに)む。(と肩をかわし、身を捻ひねつて背向そがいに

なる、舞台に面を返す時、口におもて一条の征矢、手にまた一条の矢を取る。下より射たるを受けたるなり）推参な。

——たちまち鉄砲の音、あまたたび——

薄 それ、皆さん。

侍女等、身を垣にす。

朱の盤 姥殿しつか、確り。（姫を庇かほうて大手を開く。）

亀姫 大事な、大事な。

夫人（打笑む）ほほほ、皆が花火線香をお焚たき——そうすると、鉄砲の火で、この天守が燃えると思つて、吃驚びっくりして打たなくなるから。

——舞台やや暗し。鉄砲の音止やむ——

夫人、亀姫と声を合せて笑う、ほほほほほ。

夫人 それ、御覧、ついでにその火で、焼けそうな処を二三処焚  
くが可い、お亀様の路の松明にしようから。

舞台暗し。

亀姫 お心づくしお嬉しや。さらば。

夫人 さらばや。

寂寞、やがて燈火の影に、うつくしき夫人の姿。舞台に

ただ一人のみ見ゆ。夫人うしろむきにて、獅子頭に対し、机  
に向い巻ものを読みつつあり。間を置き、女郎花、清らかな  
小搔巻を持ち出で、静に夫人の背に置き、手をつかえて、  
のち去る。――

ここはどこの細道じゃ、細道じゃ。

天神様の細道じゃ、細道じゃ。

舞台一方の片隅に、下の四重に通ずべき階子の口あり。その口より、まず一の雪洞頭れ、一廻りあたりを照す。やがて衝と翳すとともに、美丈夫、秀でたる眉に勇壯の氣満つ。黒羽二重の紋着、萌黄の袴、臘鞞の大小にて、姫川図書之助登場。唄をききつつ低徊し、天井を仰ぎ、廻廊を窺い、やがて燈の影を視て、やや驚く。ついで几帳を認む。彼が入るべき方に几帳を立つ。図書は躊躇の後決然として進む。瞳を定めて、夫人の姿を認む。劍夾に手を掛け、氣構えたるが、じりじりと退る。

夫人 (間) 誰。

図書 はつ。(と思わず膝を支く) それがし 某。

夫人 (面のみ振向く、——無言。)

図書 わたくし 私は、当城の太守に仕うる、武士の一人いちにんでございます。

夫人 何しに見えた。

図書 百年以来、二重三重までは格別、当お天守五重までは、生しょう

わたくし あるものの参った例ためしはありませぬ。今宵、大殿の仰せに依つて、

私、見届けに参りました。

夫人 それだけの事か。

図書 且つまた、大殿様、御秘蔵の、日本一の鷹がそれまして、

お天守のこのあたりへ隠れました。行方を求めよとの御意でござ

ございます。

夫人 翼あるものは、人間ほど不自由ではない。千里、五百里、勝手な処へ飛ぶ、とお言いなさるが可よい。——用はそれだけか。

図書 別に余の儀は承りませぬ。

夫人 五重に参つて、見届けた上、いかが計らえとも言われなかつたか。

図書 いや、承りませぬ。

夫人 そして、お前も、こう見届けた上に、どうしようとも思ひませぬか。

図書 お天守は、殿様のものでございます。いかなる事がありましようとも、私わたくし一存にて、何と計らおうとも決して存じませぬ。

夫人 お待ち。この天守は私のものだよ。

図書 それは、あなた貴方のものかも知れませぬ。また殿様は殿様で、

御自分のものだど御意遊ばすかも知れませぬ。しかし、いずれにいたせ、わたくし私のものでないことは確でたしかございます。自分のものでないものを、殿様の仰せも待たずに、どうしようとも思いませぬ。

夫人 すずしい言葉だね、その心なれば、ここを無事で帰られよう。私も無事に帰してあげます。

図書 みようが冥加に存じます。

夫人 今度は、播磨が申しきけても、決して来てはなりません。

ここは人間の来る処ではないのだから。——また誰も参らぬよ

うに。

図書 いや、私が参らぬ以上は、五十万石の御家中、誰一人参り  
ますもののございますまい。皆生命が大切でございますから。

夫人 お前は、そして、生命は欲しゆうなかつたのか。

図書 私は、仔細あつて、殿様の御不興を受け、お目通を遠ざ

けられ閉門の処、誰もお天守へ上りますものがないために、急  
にお呼出しでございました。その御上使は、実は私に切腹仰せ  
つけの処を、急に御模様がえになつたのでございます。

夫人 では、この役目が済めば、切腹は許されますか。

図書 そのお約束でございました。

夫人 人の生死は構いませんが、切腹はさしたくない。私は武



士の切腹は嫌いだから。しかし、思い掛がけなく、お前の生命いのちを助けました。……悪い事ではない。今夜はいい夜よだ。それではお帰り。

図書 姫君。

夫人 まだ、居ますか。

図書 は、恐入おそつたる次第ではございませんが、御姿を見ました事を、主人に申まして差支さしえはございませんか。

夫人 たしか確にお言いなさいまし。留守でなければ、いつでも居るから。

図書 武士の面目おもてに存ぞんじます——御免。

ほんぼり雪洞を取とつて静しずかに退座たいざす。夫人 長煙管ながぎせるを取とつて、はた払はく音

に、図書板敷にて一度留まり、直ちに階子の口にて、燈を下  
に、壇に隠る。

鐘の音。

時に一体の大入道、面も法衣も真黒なるが、もの陰より藁  
を渡り梢を伝うがごとくにして、舞台の片隅を伝い行き、花  
道なる切穴の口に踞まる。

鐘の音。

図書、その切穴より立踰る。

夫人すつと座を立ち、正面、鼓の緒の欄干に立ち熟と視る時、  
図書、雪洞を翳して高く天守を見返す、トタンに大入道さし  
覗きざまに雪洞をふつと消す。図書身構す。大入道、大手

を拡げてその前途ゆくてを遮る。

鐘の音。

侍女等、凜々りりしき扮装いでたち、揚幕より、懐劍、薙刀なぎなたを構えて出づ。凶書扇子を抜持ち、大入道を払い、懐劍に身を躲かわし、薙刀と丁ちようと合わす。かくて一同を追込み、揚幕際に扇を揚げ、屹きつと天守を仰ぐ。

鐘の音。

夫人、従容しやうようとして座に返る。凶書、手探りつつもとの切穴を捜さがる。(間)その切穴に没す。しばらくして舞台なる以前の階子の口より出づ。猶予ためらわず夫人に近づき、手をつく。

夫人 (先んじて声を掛く。おだやか穩かに) また見えたか。

図書 はつ、夜陰と申し、再度御左右おそうを騒がせ、まことに恐入りました。

夫人 何しに来ました。

図書 御天守の三階中壇まで戻りますと、鳶とびばかり大さの、野のぶす衾まかと存じます、大蝙蝠おおこうもりの黒い翼に、燈ともしびを煽あおぎ消されまして、いかにとも、進退度を失いましたにより、灯を頂きに参りました。

夫人 ただそれだけの事に。……二度とおいででないと申した、私の言葉を忘れましたか。

図書 針ばかり片割かたわれづき月の影もささず、下に向えば真やみの暗黒。男が、足を踏みはずし、壇を転がり落ちまして、不具かたわになどなり

ましては、生効いきがいもないと存じます。上を見れば五重のここよ  
 り、幽かすかにお燈あかりがさしました。お咎とがめをもつて生命をめさりよう  
 とも、男といたし、階子から落ちて怪我けがをするよりはと存じ、  
 おんおんいいましましめめ 御戒ごがいをも憚はばからず推参おしんいたしてございます。

夫人にっこり（莞爾と笑む）ああ、爽さわやかなお心、そして、貴方いさまはお勇いし  
 い。燈あかりを点つけて上げましようね。（座を寄す。）

図書 いや、お手ずからは恐多わたくしい。私わたくしが。

夫人 いえいえ、この燈ともは、明星、北斗星、竜の燈、玉の光もお  
 なじこと、お前の手では、蠟燭ろうそくには点つきません。

図書 ははッ。（瞳こらを凝こらす。）

夫人、世話めかしく、雪洞ほんぼりの蠟ほんぼりを抜き、短檠たんけいの灯いを移いす。

燭しよくをとつて、熟じつと凶書おもての面みを視る、恍惚うっとりとす。

夫人（蠟燭を手にしたるまま）帰したくなくなつた、もう帰すまいと私は思う。

凶書 ええ。

夫人 貴方は、播磨が貴方に、切腹を申しつけたと言いました。

それは何の罪でございます。

凶書 私わたくしが拳こぶしに据たえました、殿様が日本一とて御秘蔵の、白い鷹を、このお天守へ逸そらしました、その越度おちど、その罪過とがでございませす。

夫人 何、鷹をそらした、その越度、その罪過、ああ人間というもののは不思議な咎とがを被おほせるものだね。その鷹は貴方が勝手に鳥

に合せたものではありませんまい。天守の棟に、世にも美しい鳥を  
 視<sup>み</sup>て、それが欲しさに、播磨守が、自分で貴方にいいつけて、  
 勝手に自分でそらしたものを、貴方の罪にしますのかい。

図書 <sup>しゆう</sup>主と家来でございませう。仰せのまま生命<sup>いのち</sup>をさし出しますの  
 が臣たる道でございませう。

夫人 その道は曲つていませう。間違つたいいつけに従うのは、  
 主人に間違つた道を踏ませるのではありませんか。

図書 けれども、鷹がそれました。

夫人 ああ、主従とかは可恐<sup>おそろ</sup>しい。鷹とあの人間の生命<sup>いのち</sup>とを取<sup>とり</sup>  
 えるのでございませうか。よしそれも、貴方が、貴方の過<sup>あやまち</sup>失な  
 ら、君と臣というもののそれが道なら仕方がない。けれども、

播磨がさしずなら、それは播磨の過失というもの。第一、鷹を失ったのは、貴方ではありません。あれは私が取りました。

図書 やあ、貴方が。

夫人 まことに。

図書 ええ、お怨うらみ申上ぐる。(刀に手を掛く。)

夫人 鷹は第一、誰のものだと思います。鷹には鷹の世界がある。

露霜の清い林、朝嵐夕風の爽かな空があります。決して人間の持ちものではありません。だいまよう諸侯しよなどというものが、思上

った行過ぎな、あの、鷹を、ただ一人じめに自分のものと、つけ上りがしています。貴方はそうは思いませんか。

図書 (沈思す、間)美しく、気高い、そして計り知られぬ威の



ある、姫君。——貴方にはお答が出来かねます。

夫人 いえ、いえ、かどだてて言籠めるのではありません。私の

申すことが、少しなりともお分りになりましたら、あのその筋

道の分らない二三の丸、本丸、たいこうまる太閤丸、くるわうち廓内、御家中の

世間へなど、もうお帰りなさいますな。しろがね白銀、こがね黄金、球、さ珊

んご瑚、千石万石の知行より、私が身を捧げます。腹を切らせる殿

様のかわりに、私の心を差上げます、私の生命いのちを上げましょう。

貴方お帰りなさいますな。

凶書 迷いました、姫君。殿に金鉄の我が心も、波打つばかり悩

乱をいたします。が、決心が出来ません。わたくし私は親にも聞きたし、

師にも教えられたし、書もつにも聞かねばなりません。お暇いとまを

申上げます。

夫人（歎息す）ああ、まだ貴方は、世の中に未練がある。それではお帰りなさいまし。（この時蠟燭を雪洞に）はい。

図書 途方に暮れつつ参ります。迷まよの多い人間を、あわれとばかり思召せ。

夫人 ああ、優しいそのお言葉で、なお帰したくなくなつた。

たもと  
（袂を取る。）

図書（屹ぎつとして袖を払う）強いて、たつて、お帰しなくば、お抵抗てむかいをいたします。

夫人（微笑ほほえみ）あの私に。

図書 おんでもない事。

夫人 まあ、お勇ましい、凜々りりしい。あの、獅子に似た若いお方、お名が聞きたい。

図書 夢のような仰せなれば、名のありなしも覚えませぬが、姫川図書之助と申します。

夫人 可なつかし懐い、嬉しいお名、忘れません。

図書 以後、お天守下したの往ゆきかいは、誓つて礼拝をいたします。

——御免。（衝つと立つ。）

夫人 ああ、図書様、しばらく。

図書 是非もない、所詮しよせん活いけてはお帰おきてしない掟おきてなのでございませぬか。

夫人 ほほほ、播磨守の家中とは違います。ここは私の心一つ、

掟などは何にもない。

図書 それを、お呼留め遊ばしたは。

夫人 おはなむけがあるのでござんす。——人間は疑深い。卑ひきよ

怯うな、臆おくびよう病やうな、我わがまま儘ままな、殿様などはなおの事。貴方が

この五重へ上つて、この私を認めたことを誰もほんとうにはせ

ぬであろう。清い、爽かな貴方のために、記念しるしの品をあげまし

よう。しずか（静しずかに以前の兜かぶとを取る）——これを、その記念しるしにお持ち

なさいまし。

図書 存じも寄らぬ御おんたまもの、姫君に向い、御辞退はかえつて

失礼。余り尊い、天あつぱれ晴はれな御おん兜かぶと。

夫人 金銀は堆うずたかけけれど、そんなにいい細工ではありません。しか

し、武田には大切な道具。——貴方、見覚えがありますか。

図書 うたがい（疑の目を凝しこらつつあり）まさかとは存ずるなり、私わたくしとて

も年に一度、虫干の外には拝しませぬが、ようも似ました、お家の重宝ちようほう、青竜の御兜。

夫人 まったく、それに違いありません。

図書 がくぜん（愕然とす。急に）これにこそ足の爪立つまだつばかり、心急

ぎがいたします、御暇おいとまを申うけます。

夫人 今度来ると帰しません。

図書 誓って、——仰せまでもありません。

夫人 さらば。

図書 はっ。（兜を捧げ、やや急いで階子はしごに隠る。）

夫人（ひとりもの思い、机に頬杖つき、獅子にも言う）貴方、あの方を——私わたくしに下さいまし。

薄（静に出づ）お前様。

夫人 薄か。

薄 立派な方でございます。

夫人 今まで、あの人を知らなかった、目の及ばなかった私は恥かしいよ。

薄 かねてのお望みに叶かのうた方を、何でお帰しなさいました。

夫人 生命いのちが欲しい。抵抗てむかいをすると云うもの。

薄 御一所に、ここにお置き遊ばすまで、何の、生命いのちをお取り遊ばすのではございませぬのに。

夫人 あの人たちの目から見ると、ここに居るのは活きたものではないのだと思います。

薄 それでは、貴方の御容色と、そのお力で、無理にもお引留めが可うございますのに。何の、抵抗をしました処で。

夫人 いや、容色はこちらからは見せたくない。力で、人を強いるのは、播磨守なんぞの事、真の恋は、心と心、……（軽く）薄や。

薄 は。

夫人 しかし、そうは云うものの、白鷹を据えた、鷹匠だと

申すよ。——縁だねえ。

薄 きつと御縁がござりますよ。

夫人 私もどうやら、そう思うよ。

薄 奥様、いくら貴女のお言葉でも、これはちと痛いた入みりました。

夫人 私も痛入りました。

薄 これはまた御挨拶でござります——あれ、何やら、御天守下  
が騒がしい。(立つて欄干に出づ、遥はるかに下を覗のぞ込む) ……ま

あ、御覧なさいまし。

夫人 (座のまま) 何だえ。

薄 武士が大勢で、篝かがりを焚たいております。ああ、武田播磨守殿、

御出張、床しょうぎ几かかに掛かつてお控えだ。おぬるくて、のろい癖に、

もの見高な、せつかちで、お天守見届けのお使いの帰るのを待  
兼ねて、推おし出したのでござります。もしえもしえ、図書様のお



姿が小さく見えます。奥様、おたまじやくしの真中まんなかで、御紋ごもん着つきの御紋も河骨こうぼね、すつきり花が咲いたような、水際立つてお美しい。……奥様。

夫人 知らないよ。

薄 おお、兜あらためがはじまりました。おや、吃驚びっくりした。あ

の、殿様の漆みたいな太い眉毛が、びくびくと動きますこと。

先刻さつきの亀姫様のお土産の、兄弟の、あの首を見せたら、どうで

ございましょう。ああ、御家老が居ます。あの親仁おやしも大分百姓

を痛めて溜込ためこみしましたね。そのかわり頭が兀はげた。まあ、皆みんなが

図書様を取巻いて、お手柄にあやかるとかしら。おや、追取おっとり

刀がたなだ。何、何、何、まあ、まあ、奥様々々。

夫人 もう可い。

薄 ええ、もう可いではございません。凶書様を賊だ、と言いま

す。御秘蔵の兜を盗んだ謀逆人むほんにん、謀逆人、殿様のお首に手を

掛けたも同然な逆賊でございますとき。お庇かげで兜が戻ったのに。

——何てまあ、人間というものは。——あれ、捕手とりてが掛かつた。

忠義と知行で、てむかいはなさらぬかしら。しめた、投げた、

嬉しい。そこだ。御家老が肩衣かたぎぬを撥はねましたよ。大勢が拔連れ

た。あれ危い。豪えらい。凶書様抜合せた。……一人腕が落ちた。

あら、胴切どうぎり。また何も働かずとも可いことを、五両二人扶持ににんぶち

らしいのが、あら、可哀相かわいそうに、首が飛びます。

夫人 秀吉時分から、見馴みなれていながら、何だねえ、騒々しい。

薄 騒がずにはいられません。多勢に一人、あら切抜けた、図書様がお天守に遁にげこ込みました。追掛けますよ。槍やりまで持出した。

(欄干をするすると) 図書様が、二重へ駈かけあが上あがつておいでなさいます。大勢が追詰めて。

夫人 (片膝立つ) 可よし、お手伝い申せ。

薄 お腰元衆、お腰元衆。——(呼びつつ忙せわしく階子はしごを下り行く)。

夫人、片手を掛けつつ几帳越に階子の方を瞰みおろ下す。

——や、や、や、——激しき人声、もの音、足踏あしふみ。——

図書、もどりを放ち、衣服に血を浴ぶ。刀を振ふるつて階子の口くちに、一度屹きつと下を見込む。肩に波打ち、はつと息どうしてと

なる。

夫人 図書様。

図書 (心づき、 蹠よろよろと、 且つ呼吸いきせて急いで寄る) 姫君、

お言葉をも顧みず、 三度の推参をお許し下さい。わたくし私を賊……賊  
……謀逆人むほんにん、 逆賊と申して。

夫人 よく存じておりますよ。 昨日今日、 今までも、 お互に友と  
呼んだ人たちが、 いかに殿の仰せとて、 手の裏を反かえすように、  
ようまあ、 あなたに刃やいばを向けます。

図書 はい、 微塵みじんも知らない罪のために、 人間同志に殺されまし  
ては、 おなじ人間、 断念あきらめられない。 貴女あなたのお手に掛かかります。

—— 御禁制ごきんせいを破りました、 御約束を背きました、 その罪に伏

します。速すみやかに生命をお取り下さりたい。

夫人 ええ、武士さむらいたちの夥間なかまならば、貴方のお生命を取りましよう。私と一所には、いつまでもお活きなさいまし。

図書 (急せきつつ) お情余なさける、お言葉ながら、活きようとて、討手の奴やつばら儕、決して活かしておきません。早くお手に掛け下さいまし。貴女に生命を取らるれば、もうこの上のない本望、彼等に討たるるのは口惜くちおしい。(夫人の膝に手を掛く) さ、生命いのちを、生命を——こう云う中うちにも取詰めて参ります。

夫人 いいえ、ここまでは来ますまい。

図書 五重の、その壇、その階子を、鼠のごとく、上あがりつ下りついたしおる。……かねての風説、鬼神おにがみより、魔よりも、ここ

を恐しと存じておるゆえ、いささか躑ちゆうちよ躑ちよはいたしますが、既に、わたくし私の、かく参つたを、認めております。こう云う中にも、たつた今。

夫人 ああ、それもそう、何より前さきに、貴方をおかくまい申しておこう。(獅子頭を取る、母衣ほろを開いて、おほ図書の上に蔽いながら)この中へ……この中へ——

図書 や、金城鉄壁。

夫人 いいえ、柔い。

図書 おおせ仰の通り、真綿よりも。

夫人 そして、確しつかり、私におつかまりなさいまし。

図書 失礼御免。

夫人の背せなよりその袖すがに縋すがる。縋すがる、と見えて、身体からだその母衣おもての裾すそなる方かたにかくる。獅子頭ししづを捧たげつつ、夫人の面おもて、なお母衣おもての外そとに見ゆ。

討手うりこどやどやと入い込み、と見てわつと一度退ひく時、夫人も母衣おもてに隠かくる。ただ一頭青面の獅子猛然まげんとして舞台ぶたいにあり。

討手うりこ。小田原修理しゆり、山隅くへい九平くへい、その他その他。抜身ぬきみの槍やり、刀やいば。中には仰山おんざんに小具足せうこそくをつけたるもあり。大勢おほし。

九平くへい（雪洞ほんぼりを寄よす）やあ、怪あやしく、凄すごく、美しい、婦おんなの立姿たちざと見えたはこれだ。

修理しゆり 化ばけるわ化ばけるわ。御城ごじやうの瑞ずい兆ちやう、天人てんじんのごとき鶴つるを御覽ごらんあつて、殿様てんやう、鷹たかを合せたまえば、鷹たかはそれで破やれ蓑みのを投落なす、

……言語道断。

九平 他ほかにない、姫川凶書め、死しものぐるいに、確たしかにそれなる獅子母衣しんぼいに潜ひそつたに相違なし。やあ、上意じやういだ、逆賊ぎやくてく出合いであえ。山隅やまぐみ九平向うたり。

修理 待て、山隅、先方で潜ひそつた奴やつだ。呼よんだつて出でやしないい。  
取とつて押おえ、引摺ひきずり出だせ。

九平 それ、面々。

修理 氣きを着きけい、うかつにかかると怪我けがをいたす。元もと来ここの青あ獅子おしが、並大抵なみだいだいのものではないのだ。伝つえ聞きく。な、以前いぜんこれこは御城下ごじやうはずれ、群鷺山むらさぎやまの地主神ぢしゆじんの宮みやに飾かつてあつた。二代にだい以前の当城殿様たうじやうでんさう、お鷹狩たかとりの馬上まじやうから——一人町里まぢさとには思おもい



も寄らぬ、都みやこ方がたと見えて、世にも艶麗あでやかな女の、一行さつを颯さつと避けて、その宮へかくれたのを——とろんこの目で御覧ごらんしたわ。此方こなたは鷹狩たか、もみじ山だが、いずれ戦いくさに負けた国の、上じょう藟ろう、貴女、貴夫人たちの落人おちうどだろう。絶世の美女だ。しゃつ掴つか出みだいて奉れ、とある。御近習、宮の中へ闖ちん入にゆうし、人妻なればと、いなむを捕えて、手取足取しようとしたれば、舌かを噛かんで真俯まうつむ向けに倒れて死んだ。その時にな、この獅子頭じつを熟みと視て、あわれ獅子や、名誉の作かな。わらわにかばかりの力あらば、虎とら狼おおかみの手にかかりはせじ、と吐ほいた、とな。

続いて三年、毎年、秋の大洪水よ。何が、死骸しがい取片づけの山神おんな主が見た、と申すには、獅子かしきが頭かしまを逆にして、その婦の血おんなを舐な

め舐め、目から涙を流いたというが触出しでな。打続く洪水は、その婦おんなうらみの怨だと、国中の是沙汰これざただ。婦おんなが前髪にさしたのが、死ぬ時、髪をこぼれ落ちたというを拾つて来て、近習が復命をした、白木に刻んだ三輪牡丹高彫ぼたんたかぼりのさし櫛ぐしをな、その時の馬上の殿様は、澄すまして袂たもとへお入れなされた。崇たたりを恐れぬ荒氣の大名。おもしろい、水を出さば、天守の五重を浸ひたして見よ、とそれ、生いけど捉つて来てな、ここへ打上げたその獅子頭だ。以来、奇異妖よ変うへんさながら魔所のように沙汰する天守、まさかとは思つたが、目まのあたり不思議を見るわ。——心してかかれ。

九平 心得た、槍をつけろ。

討手、槍にて立ちかかる。獅子狂う。討手辟易へきえきす。修理、

九平等、拔連れ拔連れ一同立掛たちかかる。獅子狂う。また辟易す。修理 木彫にも精がある。活いきた獣も同じ事だ。目を狙ねらえ、目を狙え。

九平、修理、力を合せて、一ひと刀たちずつ目を傷きずつ、獅子伏す。

討手その頭かしらをおさう。

凶書 (母衣ほろを撥退はねのけ刀を揮ふるつて出づ。口々に罵ののし討手と、一刀

合ひとすと齊ひとしく) ああ、目が見えない。(押倒され、取つて伏せ

らる) 無念。

夫人 (獅子の頭をあげつつ、すつくと立つ。黒髪乱れて面凄おもすごし。

手に以前の生首の、もどりを取つて提ぐ) 誰の首だ、お前たち、目のあるものは、よつく見よ。(どっしと投ぐ。)

——討手わツと退き、修理、恐る恐るこれを拾う。

修理

なむさんぼう  
南無三寶。

九平

殿様の首だ。播磨守様御首だ。みしるし

修理

一大事とも言いようなし。御同役、お互に首はあるか。

九平

おそろし可恐い魔ものだ。うかうかして、こんな処に居べきでな

い。

討手一同、立つ足もなく、生首をかこいつつ、乱れて退く。

図書

姫君、どこにおいでなさいます。姫君。

夫人、

しょうぜん悄然

として、立ちたるまま、もの言わず。

図書

(あわれに寂しく手探り) 姫君、どこにおいでなさいます。

わたくし

私は目が見えなくなりました。姫君。

夫人（忍び泣きに泣く）貴方、私も目が見えなくなりました。

図書 ええ。

夫人 侍女こしもとたち、侍女たち。——せめては燈あかりを——

——皆、盲目めくらになりました。誰も目が見えませんでしたのでごさいます。——（口々に一同はつと泣く声、壁の彼方かなたに聞ゆ。）

夫人（獅子頭とともにハタと崩折くずおる）獅子が両眼を傷つけられました。この精しょうりよう靈で活きましたものは、一人も見えなくなりました。図書様、……どこに。

図書 姫君、どこに。

さぐり寄りつつ、やがて手を触れ、はつと泣き、相抱あいだく。

夫人 何と申そうようもない。貴方お覚悟をなさいます。今持た

せてやった首も、天守を出れば消えましよう。討手は直ぐに引返して参ります。私一人は、雲に乗ります、風に飛びます、虹の橋も渡ります。図書様には出来ません。ああ口惜くやしい。あれら討手のものの目に、蓑笠着ても天人の二人揃った姿を見せて、日の出、月の出、夕日影にも、おがませようと思つたのに、私の方が盲目になつては、ただお生命いのちさえ助けられない。堪忍して下さいまし。

図書 くやみません！ 姫君、あなたのお手に掛けて下さい。

夫人 ええ、人手には掛けますまい。そのかわり私も生きてはおりません、お天守の塵ちり、煤すすともなれ、落葉になつて朽ちましよう。

図書 やあ、何のために貴女が、美しい姫の、この世にながらえておわすを土産に、冥土めいどへ行くのでございます。

夫人 いいえ、私も本望でございませう、貴方のお手にかかるのが、  
図書 真実のお声か、姫君。

夫人 ええ何の。——そうおっしゃる、お顔が見たい、ただ一目……千歳ちとせ百歳ももとせにただ一度、たった一度の恋だのに。

図書 ああ、私も、もう一目、あの、気高い、美しいお顔が見たい。  
い。（相あ継いる。）

夫人 前世ごせも後世ごせも要らないが、せめてこうして居とうござんす。  
図書 や、天守下で叫んでいる。

夫人 （屹きつとなる）口惜くやしい、もう、せめて一い時隙ときひまがあれば、

夜叉ヶ池のお雪様、遠い猪苗代の妹分に、手伝を頼もうものを。

図書 覚悟をしました。姫君、私を。……

夫人 私は貴方に未練がある。いいえ、助けたい未練がある。

図書 猶予をすると討手の奴、人間なかまに屠られます、貴女が

手に掛けて下さらずば、自分、我が手で。——（一刀を取直す

。）

夫人 切腹はいけません。ああ、是非もない。それでは私が御

介錯、舌を嚙切つてあげましょう。それと一所に、胆のたば

ねを——この私の胸を一思いに。

図書 せめてその、ものをおつしやる、貴方の、ほのかな、口

許だけでも、見えたならばな。



夫人 貴方の睫毛まつげ一筋なりと。(声を立ててともに泣く。)

奥なる柱の中に、大音あり。――

――待て、泣くな泣くな。――

工人、近江おうみのじょう之丞とうろく桃六、六十むそじばかりの柔和なる老人。頭ず

巾きん、裁着たっつけ、火打袋を腰に、扇あらわを使うてあ顕る。

桃六 美しい人たち泣くな。(つかつかと寄つて獅子かしらの頭なを撫で)

まず、目をあけて進ぜよう。

火打袋より一挺ちようの鑿のみを抜き、双の獅子まなこの眼あに当つ。

――夫人、凶書とともに、あつと云う――

桃六 どうだ、の、それ、見えよう。はははは、ちゃんと開あいた。

嬉しそうに開いた。おお、もう笑うか。誰たがよ誰たがよ、あつは

っはつ。

夫人 お爺様じいさん。

図書 御老人、あなたは。

桃六 されば、誰かの櫛くしに牡丹ぼたんも刻めば、この獅子頭も彫った、  
近江之丞桃六と云う、丹波たんばの国の楊枝ようじけずり削よ。

夫人 まあ、(図書と身を寄せたる姿を心づく) こんな姿を、恥  
かしい。

図書も、ともに母衣ほろを被かつぎて姿おおを蔽う。

桃六 むむ、見える、恥しそうに見える、極きまりの悪そうに見える、  
がやつぱり嬉しそうに見える、はっはっはっはっはっ。睦むつまじいな、  
若いもの。(石を切つて、ほくちをのぞませ、煙管きせるを横よこぐわ銜え

に煙草たばこを、すばすば）気苦勞の拳句は休め、安らかに一寢入ねいりさせ。そのうちに、もそつと、その上にも清すがしい目にして進ぜよう。

鑿のを試む。月影さす。

そりや光がさす、月の光あれ、眼玉。（鑿を試み、小耳を傾け、鬨ときのごとく叫ぶ天守下の声を聞く）

世は戦いくさでも、胡蝶ちようが舞う、撫子なでしこも桔梗ききようも咲くぞ。——馬鹿めが。（呵から々と笑う）ここに獅子ししがいる。お祭礼まつりだと思つて騒さわげ。（鑿を当てつつ）槍、刀、弓矢、鉄砲、城の奴等やつら。

——幕——

大正六（一九一七）年九月



# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 天守物語

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>